



◎金沢市の中心部に位置し、名勝・兼六園に隣接する。アメリカ人宣教師メリー・ヘッセルらが、1885年に創立した金沢女学校が母体。2004年度にSELHiの指定を受け、翌05年度に男女共学となる。特別進学コースと総合進学コースの2コース制。

設立	1885(明治18)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数	1学年約200人
13年度入試合格実績(現役のみ)	国公立大は、東京大、富山大、石川県立大に3人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、中央大、東京女子大、立教大、早稲田大、金沢工業大、同志社大、関西大、関西学院大などに延べ86人が合格。
住所	〒920-0938 石川県金沢市飛梅町1-10
電話	076-221-1944
Web Site	http://www.hokurikugakuin.ac.jp/sj/

石川県・私立
北陸学院中学・高校

進学実績向上

「伝統」に依存する 学校運営を転換し 進学校への脱皮を図る

変革のステップ

背景

◎少子化と大学進学率の低迷で志願者数が減少。志願者確保のために入試の合格最低点を下げたことで、学力低下がより一層顕著に

実践

◎特別進学コース設置、男女共学化などの改革と共に、模試を活用した授業改善、推薦入試のエントリー制導入などを推進

成果

◎志願者数は低迷期の2倍以上に回復し、大学進学率も6割に上昇。指定校推薦入試の大学数は2倍になった。初の東京大合格者も出した

**志願者確保のための入試改革が
学力低下に拍車をかける**

1885年創立の北陸学院中学・高校は、北陸地方でも最も古い学校の1つだ。キリスト教に基づく女子教育を伝統とし、根強い評価を得てきた同校が、志願者を減らしていったのは1990年代後半のこと。少子化の影響に加え、進路実績への評価が低くなったことが根底にあったと、進路指導課主任の高柳乃輔^{だいき}先生は語る。

「本校は、伝統的な女子教育を重視し、生徒には出来るだけ負担を掛けず、生徒指導と学校行事を頑張ればよいという意識がありました。進学は指定校推薦入試と北陸学院短大への推薦に偏り、その他は専門学校が就職でした。大学進学率は25%程度でした」

90年代になって少子化が進むと、受験生の高学歴志向と相まって志願者が急速に減り始める。同校は志願者数の回復を図ろうと、96年度に推薦入試を導入、翌年から入試の合格最低点を下げたが、この入試改革が同校の低迷の始まりとなった。成績下位層が増え、進路実績が出ないばかりか、生徒指導面でも課題のある生徒が入学するようになった。教師は生徒指導に追われるようになり、放課後にチームを組んで学校周辺を巡回することもあった。同校に対する地域の評価も悪くなり、それが志願者数の減少に拍車をかけるという悪循環に陥った。

危機感を募らせた同校は、進学実績の向上に向けた改革に乗り出す。2003年度に特別進学コースを設置し、05年度には男女共学化させた。しかし、改革の方向性を巡り、改革推進派の若手教師と、伝統を重んじるベテラン教師の対立が顕在化する。

若手教師の熱意が 改革の歯車を動かした

03年度、特別進学コースの1期生は5人だっ



北陸学院中学・高校
高柳乃輔 たかやなぎ・だいすけ
教職歴20年。同校に赴任して21年目。進路指導課主任。「生徒あつての教師、生徒あつての学校」。生徒のために何が出来るのかを最優先に



北陸学院中学・高校
東豪弥 ひがし・たかや
教職歴32年。同校に赴任して33年目。教務課主任。情報科主任。「昨日より若く！ 同じことはしない！」



北陸学院中学・高校
長谷川美穂 はせがわ・みほ
教職歴25年。同校に赴任して26年目。3年特別進学コース担任。「生徒一人ひとりを大切に、いつも元気に笑顔で生徒に接するよう心掛ける」



北陸学院中学・高校
高島 央 たかしま・ひろき
教職歴8年。同校に赴任して8年目。進路指導課副主任。「若い一瞬の鮮やかで繊細な感性を、生徒と共に大切にしたい」

た。これでは進学実績を上げるのは難しい。そこで、高柳先生と、教務課主任を務める東豪弥先生らは、比較的学力の高い生徒が集まる英語コースを、2年生から文系・理系に分かれるコースにすることで、理系に進む男子生徒の確保を図ることを提案した。

ところが、学校の看板であり、伝統ある英語コースの改革にベテラン教師から反対の声が上がった。高柳先生と東先生は何度も改革案を作り直して提出したが、その都度否決された。

「英語コースに理系を入れると、カリキュラムを大幅に変えなければならないため、先生方は学校の伝統が失われることを危惧されたのだと思います。私たちはなぜ改革が必要なのか、丁寧に説明しましたが、なぜ駄目なのかという理由すらも答えてもらえない状態が続きました」（東先生）

しかし、その膠着した状況を一変させたのもベテラン教師のひと声だった。03年の夏、高柳先生と東先生は覚悟を決めて会議に臨んだ。相変わらず改革案に否定的なベテラン教師が多かったが、そうした態度を見かねた別のベテラン教師が「真面目にやる気があるのですか」と、反対派の教師たちを一喝した。これを機に議論は進み始め、「そこまで熱意があるのだから、若い先生たちに任せよう」という教師も現れ、ついに英語コース理系の案が受け入れられた。

「自分の子どもを入れたいと思える学校を

つくりたい。このまま改革が出来なければ、自分の子どもに対して恥ずかしくてたまらないという思いが、私たちの原動力でした。そんな私たちの思いに、ベテランの先生方も共感していただけだと思います」（東先生）

模試の進度と内容を基に 国数英の授業改善を図る

指導改革はカリキュラム改訂から始まったが、難関大の進学指導経験がない同校の教師にとっては全てが手探りだった。

「数学の科目数や時間数を増やし、理科も物理・化学・生物の3科目を履修させました。教科書も難しい内容のものに変え、参考書や問題集を持たせるなどの工夫をしました。生徒に負荷を掛けるばかりでした。どのくらいの進度で授業を進めればいいのか、いつまでに教科書全てを終わらせればいいのかも分かっています」（東先生）

進学指導のスキルを高めるために活用したのは進研模試だ。3年間で2回のみ受験だったのを、特別進学コースの設置に合わせて1〜3年生の全ての模試を受験させることにした。国数英の教師は模試の問題を見ながら、それまでの授業進度や内容が適切であったかを確認し、次の模試までの計画を立てて授業を行い、模試後に再び確認することを繰り返した。また、定

期考査の問題は、大学入試問題や模試を参考に
して作成し、作問能力の向上を図った。

生徒には、単に与えるだけでなく、自律的に
学びに向かえる力を付けさせることも意識し
た。3年特別進学コース担任で数学科の長谷川
美穂先生は次のように述べる。

「特別進学コースの生徒には、宿題をきち
んと提出させることだけでなく、教科書や参
考書をどのように家庭学習で使えばよいか
といった点まで丁寧に指導しました。授業で
教えたから終わりではなく、自学によって定
着させるところまで指導することで、入試に
対応できる力が付くと考えました」

推薦入試のエントリー制で 意欲ある生徒を厳選

特別進学コース以外の生徒には、推薦入試を
積極的に活用する方針が採られた。元々、同校
には指定校推薦入試の枠が多く、毎年難関私立
大へ進学する生徒が一定数いた。指定校推薦入
試は学校のアピール材料の1つとなるが、安易
な受験には歯止めをかける方針を打ち出した。

そのために取り入れたのが、「エントリー制
度」だ。大学から課されるレポートや課題とは
別に、校内選考用としてエントリー用紙(図)
と面接を課し、ふさわしいと判断した生徒だけ
を指定校推薦入試の受験対象にした。

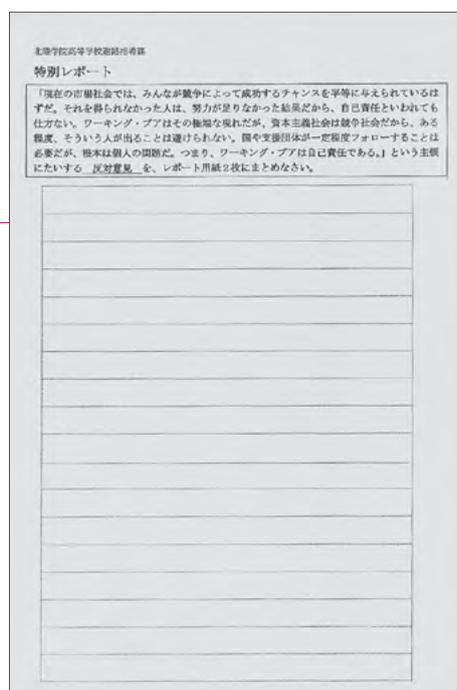
「大学の期待に応え
られる生徒を送り出す
のが高校の責任です。

女子校時代には推薦入
試の校内選考基準があ
いまいで、進学した大
学で『高校で何をやっ
て来たんだ』と言われ
た生徒もいました。厳
しい校内審査を通過す
ることで、指定校推薦

入試で大学進学する生徒も、一般入試の合格
者と同じように、堂々と胸を張って大学に進
学してもらいたいと考えました」(高柳先生)

校内選考の手順は次の通り。まず、「大学・
学部・学科の志望理由と進学後に学びたいこと」
「高校時代に頑張ったことを進学後にどのよう
に生かしていくか」などについて書くエントリー
用紙による1次審査を行う。合格者は、進路
指導課主任や担任など教師7人に対して生徒1
人という2次審査の面接に臨む。エントリー用
紙の内容に関する質疑応答が15〜20分間行われ
るが、厳しい質問がされることもあり、緊張の
あまり泣き出してしまふ生徒もしばしばいる。
しかし、そうした厳しい校内選考を経験するこ
とで、自信を持って受験し、堂々と進学する。
また、国公立大や難関私立大の他の推薦入試に
挑戦する生徒も次々に現れている。

図 推薦入試校内選考用のエントリー用紙(抜粋)



指定校推薦入試の校内選考用エントリー用紙は全13
枚で、志望理由、活動履歴、特別レポートなどを書く。
トータル文字数は3,000字以上にもなる。
*学校資料から抜粋して掲載

ボランティア活動で 自己肯定感を育む

改革の一方、「勉強プラスもうひとつ」とい
う教育方針を掲げ、部活動や学校行事、ボラン
ティア活動などの伝統的な取り組みも大切に守
り続ける。特に、ボランティア活動は同校の根
幹ともいえる取り組みで、生徒を大きく成長さ
せる契機となっている。「地域訪問」「募金活動」
「施設での奉仕」が活動の中心で、グループで
地域の高齢者宅を訪問して話し相手になった
り、駅前などで募金活動を行ったりしている。

地域への奉仕が目的だが、むしろ生徒が得る
ものの方が大きいという。地域訪問後、「寂し
い高齢者のために行ったつもりでしたが、私た
ちをととても歓迎してくれて、大事にされている
のは私たちの方だと気付きました」と感想を綴

る生徒もいる。そうした体験の一つひとつが他者への思いやりや自己肯定感を育み、高校生活を充実したものに変わっていくのである。

ボランティア活動に限らず、進路行事や講演会などの後には、必ず感想やレポートを書かせる。進路指導課副主任の高島央先生は言う。

「短くてもよいので、振り返りの文章を書かせています。体験を自分なりに受け止めている生徒は、『部活動が大変だったけれども、礼拝の言葉を聞いた心が落ち着いた』というように、つたないながらも心のこもった文章が書けるようになります」

生徒一人ひとりに応じた オーダーメイドの進路指導を目指す

改革に着手して10年、同校は進学校としての評価を着実に固めつつある。大学進学率は07年度に37%を超え、10年度には60%に。一般入試で国公立大や難関私立大に合格する生徒も増え、13年度には初めて東京大の合格者が出た。

志願者も年々増加して低迷期の2倍以上となり、特別進学コースの生徒数は13年度に100人に達した。大学の指定校推薦入試枠も改革前の2倍の約100校となった。中学生から保護者、中学校、大学まで、あらゆるステークホルダーに改革が評価された結果といえる。

そして、学校の雰囲気も大きく変わった。

情熱 若手教師が語る、指導変革への

地道に頑張るところから 「やりがい」は生まれる

進路指導課副主任、2学年主任 高島 央

私が本校に赴任したのは、学校改革が形になり始めた2006年のことでした。まだ生徒数は少なく、課題の多い生徒もいて、この学校にいつまで勤務できるのかわからないといった印象を持ちました。

それでも頑張ろうと思ったのは、2年目から担任を任せていただき、日々生徒と接していたからです。教師としての楽しさややりがいを感じ、この学校で頑張ろうという覚悟がどんどん固まってきました。また、30～40代の先生方が一生懸命改革に取り組んでいる姿にも心を動かされました。学校が変わっていく過程を間近に見ることで、中途半端な気持ちで仕事することは許されないと強く感じるようになったのです。

進路指導課では地道な作業の連続でした。進研模試の各単元の成績を生徒全員分取り出して、どこが弱点なのかを一つひとつ洗い出すといったことをしていましたが、当時は何のためにそれをしているのかわからず、ここまでする必要があるのかと考えたこともありましたが、担任として進路指導を行う中で、そのデータを基に三者面談で具体的なアドバイスが出来た時、分析をやってよかったと実感できました。

今後、生徒が増えるにつれて、本校にも新しい先生が入ってくるでしょう。最初は大変でも地道な作業の中に意味があること、くじけずに継続していくことで必ずやりがいは見つかるということを、後輩たちに伝えていきたいと思っています。

「学校で自習するのは、以前は特別進学コースの生徒だけでしたが、今では多様な進路を選ぶ総合進学コースでも、早朝や放課後に教室で自習する姿が見られます。先輩の姿を見て、自分たちにも出来る、頑張ろうという意識を強く持つのでしょ」(長谷川先生)

今後の課題は、教師の指導力を高めていくことだと高柳先生は語る。

「生徒の志望レベルは以前よりも格段に高くなっています。そうした期待に応えるためには、教師一人ひとりがあらゆる場面において高いレベルで指導できるスキルを身に付ける必要があります。個々の指導力を高め、組織的に共有することが大切になるでしょう」

指導力向上のため、現在、模試の成績データなどを基に算出した志望校とのギャップや合格可能性などを一覧にした、生徒個々の進路カルテを作成中だ。客観的なデータを駆使しながら生徒の志望や学力に応じた指導を行っていく。

「本校は、生徒や保護者、地域、大学の期待に応えるために、何が出来るのかを考えながら改革に打ち込んできました。その精神を忘れたら、本校は立ち行かなくなるでしょう。まだ本校は、進学校として大きな評価を得るまでに至っていません。中学生や保護者、生徒のニーズを敏感に察知し、謙虚に学校改革に取り組むことで、社会から評価をいただける学校にしたいと考えています」(東先生)

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2007年2月号指導変革の軌跡「大阪府・私立啓光学園中学・高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報誌(高校向け)